

明　　る　　い　　夜　　道

むかしのこと、横根村に住む吾作と六助が暗くなつた夜道を歩いていました。

「あしたから十一月だで、あしたの朝早ように出雲から神さんが帰つておいでる。ほんだで、熱田さんにおむかえに行つといで。」

と、おつかあにいわれた吾作は、遊びづれの六助をさそつて、晩げになつてから家を出たのです。

吾作は、背中におつかあが作つてくれたにぎり飯をしょこない、六助は、手にちようちんを持つていました。

「なあ、六助よう。こころはさびしゆうて、おらあ、ひとりじゃあよう歩かん。六助といつしよなら心強いわあ。」

「それでも、おらあ、やつぱりあんまりええ気がせんもう。なんでも、最近、きつねがよう出るちゆう話だ。おらあ、気味悪うてなあ。」

と、辺りを気にしながらいいました。

「なあに、心配せんでええ。きつねが出てきたら、おらあ、ふんづかまえてやるに。」

ふたりおやあ、だまされることもあやへんに。」

「そうだな。ふたりおやあ、だいじょうぶだな。」

と、ふたりは夜道を歩きながら、強がつて話していました。

そのうち、どうしたとか、六助の持っていたちょうちんの明かりがふつと消えてしまいました。

「六助、火打ち石を早う出せ。早う。」

と、吾作がせかせます。六助は着物のあちこちを探しながら、

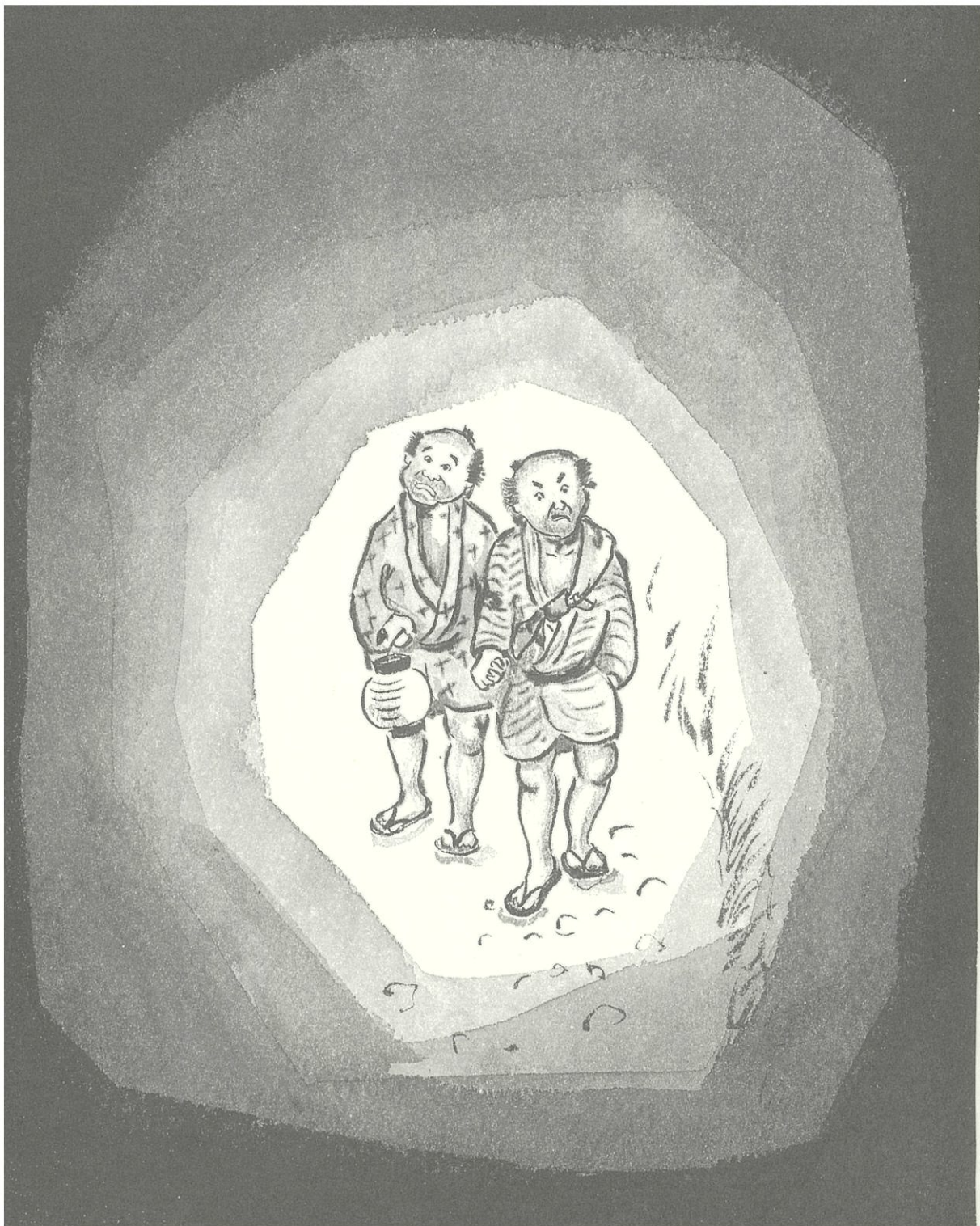
「困ったなあ。おらあ、火打ち石をどつかへ落としちゃったみたいだ。どこにもあやへん……。すまん、すまん。火打ち石がなきやあ、しょうがにやあわ。こう暗くちや危あぶにやあで、ゆつくり行こまい。」

と、すまなさそうにいました。熱田には、あすの日の出までに着けばいいのだからあわてません。時間はたつぷりあります。

ところが、暗いはずの道が、吾作には月が出ている夜よりも、もつと明るく見えるのです。小さな石ころの一つ一つまで、はっきり見えるのです。六助は、

「暗いなあ、よう見えんわ。暗いなあ。」

と、くりかえしいっています。吾作は、



「ほれ、その石にけつまずくぞ。ほれ、そこそこ……。」

と、六助の手を引いてやりながら、

「おらあ、ふくろうになつたわけじゃにやあのに、こんなに夜道がはつきり見えるなんて……。ははあん、こりやあきつと、きつねのしわざだ。そうにちぎやあにやあ。
(遠い)

だけど、今、六助にこのことをいおうとおそががるな。
(こわがる)

と、考えていました。小石がまるでお日さんに照らされて、きらきら光っているような不思議な道をだまつて歩いていきました。

やがて、ふたりは、二つ池ふたついけのそばまで来ました。そこで、ポチャポチャと水の音が聞こえてきたときです。吾作は、

「あつ。」

とさけんで、立ち止まりました。今まで吾作には明るかった道が、ぱつと暗くなつたのです。

「おうい、いつてやあ、どうしたんだ。」

六助が声をかけました。吾作は、真つ暗になつた夜道で、六助の手をしつかりとにぎつて、

「実はのう、おらあなあ、さつきまできつねにたぶらかされておつたんだ。おんしに
(お前)
(だまされる)

いとおそががると思つて、だまつておつただが……。こんなに暗い夜道なのに、明るく見えていてな。石ころの一つ一つまで、よう見えておつたんだ。」
と、不思議な出来事を話しました。

「ふうん、きつねめ、吾作のしょこなつとるにぎり飯をねらいおつたな。」

と六助は、真つ暗になっている辺りを見わたしましたが、二つ池の水の音が聞こえてくるばかりでした。

「やつぱり、夜道は暗い方がええわ。夜道がお日さんに照らされているみたいなんてやつぱり変だもんなあ。」

「きつねに、にぎり飯の一つでもやつとけばよかつたのかのう。」

などと話しながら、吾作と六助は暗い夜道をゆつくりと歩いていきました。

横根地区に伝わる話です。

前の「きつねに化かされた旅人」とよく似た話です。場所も同じ道すじの二つ池近くです。

横根から熱田さん（名古屋市熱田区の熱田神宮）へ行くには、徒歩で六時間ほどかかりました。

十月は、全国の神様が出雲に集まって一年のことを話し合うので、地方に神様がいなくなつてしまします。それで、十月を神無月と書き、「かんなづき」といいました。九月の末には神送り、十一月の初めには神迎への行事がありました。